※令和５年７月まで展示していた掛軸です。

短歌「晴天にひと花ひらく白牡丹海とほくみゆる青芝の庭に　水穂」	太田水穂　昭和 12(1937)年作　歌集『螺鈿』収録
短歌「菊の露しづれしづれて真玉ともおもふ夕べのこほろぎの声　水穂」	太田水穂　昭和 17(1942)年作　歌集『流鶯』収録
短歌「屋廂に音たててふる榎の落葉こころけふよりしぐれを恋ふる　水穂」	太田水穂　昭和 13(1938)年作　歌集『螺鈿』収録
短歌「人ごころあやふきに花鳥の天のひろ道いや盛んなれ　水穂」	太田水穂　昭和 21(1946)年作　歌集『流鶯』収録
短歌「ゆくりなく枝をはなれてちる花のそのひとひらのゆくかたもみむ　水穂」	太田水穂　昭和 09(1934)年作　歌集『螺鈿』収録
短歌「一夜ねて雲とぶそらに今朝きくや即非の松の秋かぜのこゑ　光子」	四賀光子　昭和 07(1932)年作　歌集『朝月』収録
短歌「うす墨にあゐのふじみてすそのなす野なかのふじによる雲もなし　喜志子」	若山喜志子　全歌集になし
短歌「わが庭の竹の林の浅けれどふる雨みれば春は来にけり　牧水」	若山牧水　大正 05(1916)年作　歌集『朝の歌』収録
短歌「かたはらに秋くさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな　牧水」	若山牧水　明治 43(1910)年作　歌集『路上』収録
短歌「風にむかふわが耳鳴りのたえまなし心けどほくただ歩みをり　赤彦」	島木赤彦　大正 09(1920)年作　歌集『太虚集』収録
短歌「わが庭の池の底ひに冬久し沈める魚の動くことなし　赤彦」	島木赤彦　大正 09(1920)年作　歌集『氷魚』収録
短歌「福寿草の莟いとほしむ幼子や夜はゐろりの火にあてて居り　赤彦」	島木赤彦　大正 10(1921)年作　歌集『太虚集』収録
短歌「電燈の遠き灯のさす草の葉の土にはへるが皆ゆ（らぎ出づ）　空穂」	窪田空穂　昭和 10(1935)年作　歌集『郷愁』収録
短歌「ふる里にありやとまどふ夕ぐれを蕎麦うつ音のもりて来る家　空穂」	窪田空穂　昭和 24(1949)年作　全歌集になし

短歌「ふれがたき枝と見ゆれどぼけの花こぼるるばかり赤き花さく　寛」	与謝野鉄幹　歌集『相聞』収録
短歌「山めぐりさとめぐりしてむらしぐれ木々の紅葉を千々に染らむ　八十六叟　浅井洌」	浅井洌　昭和 09(1934)年作　掲載不明
俳句「大空に又わき出でし小鳥かな　虚子」	高浜虚子　大正 05(1916)年作　句集『五百句』収録
俳句「新茶煮て此緑陰の石を掃ふ　七十九　鳴雪」	内藤鳴雪　明治 42(1909)年作　句集『鳴雪句集』収録
俳句「鳥一聯浅間かすかに噴きゐけり　美穂」	田中美穂　掲載不明

※令和５年５月まで展示していた掛軸です。

短歌「高はらの古りにし駅に霽るる日の明るさ入れて郭公の啼く　水穂」	太田水穂　昭和 21(1946)年作　　歌集『流鶯』収録
短歌「ゆくりなく枝をはなれてちる花のそのひとひらの行方もみむ　水穂」	太田水穂　昭和 9(1934)年作　　歌集『螺鈿』収録
短歌「なにごとかありけるごとく芥子畠の芥子ひとところ風にさゆらぐ　水穂」	太田水穂　昭和 15(1940)年作　　歌集『流鶯』収録
短歌「明日はこむ霜のけはひを大空のまたたきにみせてさゆる月かも　水穂」	太田水穂　全歌集になし
短歌「まかがよふ光のなかにあぢさゐの玉のむらさき冷やかに澄む　水穂」	太田水穂　昭和 5(1930)年作　　歌集『鷺』収録

短歌「たらちねのははをこふればいはけなく心は泣かゆ老いづく今も　光子」	四賀光子　昭和 17(1942)年作　　歌集『麻ぎぬ』収録
短歌「春の野のしたもえ草のあさみどりあやふくぞおもふ生ひ立つ子等を　喜志子」	若山喜志子　昭和 5(1930)年作　　歌集『現代短歌叢書 若山喜志子篇』収録
短歌「うす紅に葉はいち早く萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花　牧水」	若山牧水　大正 11(1922)年作　　歌集『山桜の歌』収録
短歌「冬山にたてる煙ぞなつかしきひとすぢ澄めるむらさきにして　牧水」	若山牧水　大正 10(1921)年作　　歌集『山桜の歌』収録
短歌「死火山の裾野の冬の猶長き日かず思ひつつ灯をともすかも／西窓のうすら明りに藁を打つとなりの音のはや聞え居り／明治四十五年夏七月　柿の村人」	島木赤彦　明治 45(1912)年作　　歌集『馬鈴薯の花』収録
短歌「草枯の国のくぼみにかたまれる沼のいくつに日のあたりけり　柿の村人」	島木赤彦　明治 44(1911)年作　　歌集『馬鈴薯の花』収録
短歌「八丈島　はるばるに波の遠音のひびきくる木のかげ深く月夜の踊り　赤彦」	島木赤彦　大正 3(1914)年作　　歌集『切火』収録
短歌「海の風南よりふけば六甲のたか根の草はみな花となれり　六甲山上にて　空穂」	窪田空穂　大正 10(1921)年作　　歌集『青水沫』収録

短歌「道の辺のたかき黒松見あぐれば冬来し空の眼のうへに見ゆ　空穂」	窪田空穂　昭和 2(1927)年作　　歌集『青朽葉』収録
詩「伝説の美女を背に戴せて先史時代の王者を征服する蝸牛　孤雁」	吉江孤雁　昭和 5(1930)年作　　吉江喬松詩集『蝸牛の銀の涙』より
短歌「物思ふ葦にしあればゆく雲の高きに舞はむ心をわがもつ　青丘」	太田青丘　昭和 22(1947)年作　　歌集『国歩のなかに』収録
短歌「ゆあみをへてさかづきとればはこねやまもみじもよへりみねのゆふひに　羽衣」	武島羽衣　掲載不明
短歌「霜を含む小鳥の啼く音細ければ朝は身にしむ山の静けさ　柊花」	中村柊花　昭和 10(1935)年作　　歌集『山彦』収録
短歌「天つ日の照れる寂かさや畳なはる山並のうねり四方につづける　古實」	藤澤古實　大正 10(1921)年作　　歌集『国原』収録